

## 古代出雲の須恵器生産と中海・穴道湖の水運 ー大井窯での集約生産の実態とその意味ー

島根県埋蔵文化財調査センター 丹羽野 裕

### 1. はじめに

### 2. 『出雲国風土記』に現れる大井窯の須恵器作り

「大井濱。即ち海鼠・海松あり。又、陶器（すえのもの）を造れり。」

須恵器生産を具体的に記した最古の史料  
島根郡の入海の項で記載されている。

「南は入海なり。西より東に行く。」

入海の記載は、西から東へ船上から見た景観が記されている。現在の大井町近辺

古代出雲の須恵器窯・・・10カ所近く見つかっている。

大井濱にだけ須恵器生産が記される。

大井に何か特別な事情があったことがうかがわれる。

大井窯の「特別な事情」を考古資料から探り、出雲の須恵器生産の特質を明らかにしたい。

### 3. 出雲における須恵器生産

#### 1) 須恵器とは

トンネル状の窯で焼かれた、灰色・青灰色に焼しめられた焼き物  
ロクロを使って整形された。

5世紀前後に、大陸から製法が伝えられた

ポイントは還元炎焼成。

最後に窯を閉め、酸素をシャットアウトし、還元雰囲気です仕上げをする。

貯蔵用の甕と供膳用の坏類や瓶類が中心的な器種

5世紀後半頃から地方でも須恵器を生産するようになった。

ヤマトからの技術の拡散・・・ヤマト王権の手工業政策の一環  
当初や古墳や祭祀の場で用いることが主体であった。

6世紀後半には、須恵器を古墳に副葬することが一般化

同時に、古墳の築造数が爆発的に増加

一般集落での使用も一般化する

6世紀後半頃から需要が一気に増大・・・全国各地に窯場が開かれる。

古墳が作られなくなる7世紀後半以降も、須恵器の利用は続く。

奈良時代終わり頃（8世紀後半頃）から、生産効率の悪い須恵器は次第に少なくなっていく。

10世紀前後には、須恵器の生産はほぼ終了する。

#### 2) 出雲の須恵器窯

出雲の須恵器窯は、大雑把に8つの時期に分けて考えることが出来る

現在のところ最古の窯は、5世紀末頃

安来市門生窯跡群、松江市渋ヶ谷窯跡群、大井窯跡群が古い段階の窯跡  
6世紀前半には、出雲市平田の深谷窯でも焼成が行われる。

6世紀後半頃になると、大井窯跡群では複数の窯の存在が確認できる  
大井以外の地域では窯が見られなくなってくる。

8世紀後半頃になると、大井以外で再び須恵器窯が見られるようになる。  
9世紀～10世紀前後に須恵器生産は終わりを迎える。

### 3) 大井窯跡群の概要

5世紀末頃に生産が始まり、9世紀頃に終焉・・・出雲全体の須恵器生産全時代に操業  
9カ所の支群に分かれて窯跡が分布し、島根県最大の須恵器窯跡群である

第4段階(6世紀末頃)から第6段階(8世紀前半頃)まで、たくさんの窯が作られた。  
他地域では当該期の窯はほとんど無く、大井で集約的に生産された可能性が高い

表1 大井窯跡群における須恵器窯の段階別操業時期

| 窯の段階 | 第1段階        | 第2段階 | 第3段階 | 第4段階             | 第5段階   | 第6段階    | 第7段階                  | 第8段階 |
|------|-------------|------|------|------------------|--------|---------|-----------------------|------|
| 大谷編年 | 大谷Ⅰ期        | 大谷Ⅱ期 | 大谷Ⅲ期 | 大谷Ⅳ期             | 大谷Ⅴ・Ⅵ期 | 大谷Ⅶ     |                       |      |
| 高広編年 |             |      | 高広ⅠA | 高広ⅠB             | 高広ⅡB   | 高広ⅢABⅣA | 高広ⅣB                  | 高広Ⅴ  |
| 想定年代 | 5末～6初       | 6前半  | 6後半  | 7前半              | 7前半～中  | 7後半～8前半 | 8後半                   | 8末～9 |
| 谷型   | 寺尾支群        |      |      |                  |        |         |                       |      |
|      | 廻谷支群        |      |      |                  |        |         |                       |      |
|      | 池ノ奥支群       |      |      | 1号、5号            |        |         |                       | 6号   |
|      | 明曾支群        |      |      |                  |        |         |                       |      |
|      | 勝田谷支群       |      |      |                  |        |         |                       |      |
| 海岸型  | ハバタケ支群      |      |      |                  |        |         |                       |      |
|      | 岩汐支群        |      |      |                  |        |         |                       |      |
|      | 山津支群        |      |      | 1号               | 2号     | 3号、4号   |                       |      |
|      | 唐干支群        |      |      |                  |        |         |                       |      |
| 凡例   |             |      |      |                  |        |         |                       |      |
|      | 窯が検出されているもの |      |      | 遺物等で窯の存在が予想されるもの |        |         | 遺物が少量認められるもの。窯の存在は不明瞭 |      |

表2 出雲(大井窯を除く)における須恵器窯の段階別操業時期

| 窯の段階     | 第1段階   | 第2段階 | 第3段階 | 第4段階 | 第5段階   | 第6段階    | 第7段階 | 第8段階 |
|----------|--------|------|------|------|--------|---------|------|------|
| 大谷編年     | 大谷Ⅰ期   | 大谷Ⅱ期 | 大谷Ⅲ期 | 大谷Ⅳ期 | 大谷Ⅴ・Ⅵ期 | 大谷Ⅶ     |      |      |
| 高広編年     |        |      | 高広ⅠA | 高広ⅠB | 高広ⅡB   | 高広ⅢABⅣA | 高広ⅣB | 高広Ⅴ  |
| 想定年代     | 5末～6初  | 6前半  | 6後半  | 7前半  | 7前半～中  | 7後半～8前半 | 8後半  | 8末～9 |
| 中海南岸     | 門生山根   |      |      |      |        |         |      |      |
|          | 門生高畑   |      |      |      |        |         |      |      |
|          | 廻谷     |      |      |      |        |         |      |      |
|          | 洪山池    |      |      |      |        |         |      |      |
| 宍道湖      | 渋ヶ谷    | ?    | ?    |      |        |         |      |      |
|          | 湯峠     |      |      |      |        |         |      |      |
|          | 小松     |      |      |      |        |         |      |      |
| 湖宍北道     | 法吉長谷   |      |      | ?    |        |         |      |      |
|          | 古曾志平廻田 |      |      |      |        |         |      |      |
| 西部       | 木舟     |      |      |      |        |         |      |      |
|          | 深谷     |      |      |      |        |         |      |      |
| 大内谷(仁多郡) |        |      |      |      |        |         |      |      |

### 4. 大井窯跡群における須恵器窯跡の展開 ―谷型と海岸型―

大井窯は、東は中海(入海)に面し、残り三方を山に囲まれた小谷に位置する。  
その約2km四方の範囲で、9カ所の窯跡支群が見つかった。

大井窯の特性をあぶり出すために、2つの類型(谷型と海岸型)に分けて考えてみたい。

#### (1) 谷型支群

現在の大井町集落のある谷に面した斜面と、谷をさかのぼった丘陵斜面に立地

|       |               |                |
|-------|---------------|----------------|
| 寺尾支群  | 5世紀末～6世紀初頭    | 谷の低い耕地のある斜面    |
| 廻谷支群  | 5世紀末～6世紀初頭    | 谷の低い耕地のある斜面    |
| 池ノ奥支群 | 7世紀前半、8世紀後半、9 | 谷をさかのぼった丘陵     |
| 明曾支群  | 8世紀後半         | 谷をさかのぼり峠あたりの丘陵 |
| 勝田谷支群 | 8世紀後半         | 谷をさかのぼり峠あたりの丘陵 |

古い窯は標高の低い集落のある谷に、新しいものほど谷をさかのぼる立地  
全体としては5世紀末(1段階)から9世紀(8段階)まで生産。

個別で見ると、短期間で複数の時期にわたっていても、間隔が空いている。  
一つの窯場では、断続的な操業

## (2) 海岸型支群

眼前に海岸望むか、近距離に海岸のある小谷に立地  
大井の集落のある谷には作られない

|        |            |        |
|--------|------------|--------|
| ババタケ支群 | 6世紀末～8世紀前半 | 目の前が海岸 |
| 岩汐支群   | 6世紀末～8世紀前半 | 近距離に海岸 |
| 山津支群   | 6世紀末～8世紀前半 | 目の前が海岸 |
| 唐干支群   | 6世紀末～8世紀前半 | 目の前が海岸 |

どの支群もおおむね6世紀末～8世紀前半(4段階～6段階)同じ時期に操業  
大井窯で集約的な生産が行われる時期に合致している  
いずれの窯も、その時期の間継続的に操業

## (3) 谷型と海岸型

| 類型  | 立地                 | 全体の継続期間    | 個別窯場毎の操業期間 |
|-----|--------------------|------------|------------|
| 谷型  | 大井集落に面した谷、さかのぼった斜面 | 5世紀末～9世紀   | 単一時期又は断続的  |
| 海岸型 | 海岸に面した斜面           | 6世紀末～8世紀前半 | 継続的        |

谷型は一つの窯場では長期間操業を行わず、移動している。

古い時期ほど低い位置に、新しい窯ほど高所に移動している状況は、枯渇した燃料を得るためと考えれば合理的に理解できる。

出雲の須恵器生産が行われる時期を通じて操業しており、地元大井の工人が連綿と作り続けた窯場と考えて問題ない

海岸型は、農薬生産が困難な小谷の、海に面した斜面に立地

明らかに入海を利用した搬出入を意識した立地

特に重要だったのは、原材料の搬入であったと考えられる。

莫大な薪や重たい粘土の供給が保証されない限り、200年近くも海岸端で操業は続けられない。

操業時期は、大井窯での集約生産時期に一致

集約生産に連動して、編成された須恵器生産体制の表れではないか

## 5. 大井窯の工人集団と生産体制の想定

地元工人集団による谷型操業と、外部に原材料供給を依存した海岸型操業の二つの体制が平行していた

それぞれの体制の中での工人集団の姿を、墓制を通じて想定してみたい

### (1) 谷型窯場の工人の墓

地元の工人集団は、大井の谷の窯周辺に古墳や集団墓地を営んでいたと考えられる

埋葬施設の床に須恵器蓋坏を敷き詰めるタイプ・・・山巻古墳、米坂古墳群

棺に須恵器製の棺(陶棺)を用いるタイプ・・・

池ノ奥古墳群、大井古墳群、池ノ奥C・D遺跡の土墳墓、イガラビ古墳群

特別な須恵器棺や、須恵器を特殊な使い方をし、陶工としてアイデンティティを示す

## (2) 海岸型窯場の工人の墓を探る

海岸型窯場の近辺に墓は発見されていない。

というか、墓を造るようなスペースに欠けている。

どこに工人の墓があるのか・・・

この問題を考えるヒントが、二つの横穴墓にある。

### A. 渋山池横穴墓群

東出雲町揖屋にある横穴墓群。15穴が調査されている。

注目されるのは、そのうちの1号横穴墓

遺骸を葬る奥の部屋(玄室)に、植木鉢型の焼台を並べた上に陶棺が置かれている

焼台・・・須恵器を焼く時だけに使う窯道具

窯職人にしかわからない道具

陶棺・・・蓋と身を一体的に作り、全体を円形のスタンプと突帯で飾ったもの

大井の窯職人が用いた陶棺と酷似。大井産とみて間違いない

### B. 北小原1号横穴墓

松江市西浜佐田町にある横穴墓。冑状の陽刻のある閉塞石と2基の石棺で有名

羨道部分に大量の須恵器が供献されており、その中に大型の焼台が1点含まれている。

この焼台と同様のものが大井の岩汐窯跡群からも出土

大井で使われた窯道具である可能性が高い

これら二つの横穴墓に葬られた人は、須恵器焼成時にしか使わない(須恵器焼成にかかわらないと意味がわからない)焼台や、大井にしか出ない陶棺を持つことからみて、須恵器工人にかかわる人物とみて間違いない。

さらに注目されるのは、両地域には、大井の集約生産が終了したのちの第八段階の須恵器窯が存在していること。

## (3) 工人の墓が示す海岸型窯場の意味

横穴墓は築造時期が6世紀末～7世紀前半

まさに大井窯で集約生産がおこなわれていた時期と重なる。

また、それぞれ大井産と見て間違いない窯道具や陶棺をもつ。

これらのことから、その被葬者もしくは彼が束ねていた工人集団の仕事場は、大井窯であった可能性が想定される。

その場所はまさに、原材料を外部から供給される海岸型窯場と考えれば筋が通る。

大井地区は狭隘な可耕地しか持たず、多くの居住人口を支えるだけの地域的広さを持たない

集約生産のすべてを担うことは不可能だったと推測される

大井に須恵器生産を集約するにあたっては、他地域からの工人集団の集結と海岸型窯場を開くことが必須条件だった

## 5. 大井窯での集約生産の背景

なぜ須恵器の生産が集約されたのか

直接須恵器からそれを知ることは困難である

他の考古資料の状況から想像も交えて述べてみたい

### (1) 古墳からみた地域統合

大井への集約生産開始期の古墳に見られる画期

6世紀後半には意宇平野周辺に出雲最大の前方後方墳である山代二子塚古墳が築かれる  
意宇郡中央地域の出雲東部における覇権が確立

※意宇郡とは

古代出雲の行政区分。現在の松江市南部から安来市にあたる。  
その中心は、意宇川の地名が残るように、松江市街の南郊外  
数多くの大型古墳が築かれ、律令期には出雲国府や国分寺がおかれた  
まさに古代出雲の中心地で、八雲立つ風土記の丘地内にあたる

6世紀末には、東部独自の石棺式石室が創設

それに伴うように出雲型子持ち壺による祭祀が確立

一方で出雲西部は、東部と異なる石室を維持していくものの、石棺式石室や子持ち壺は次第に西部にまで浸潤

大井に須恵器生産が集約される時期は、東部出雲における意宇中枢勢力の地域統合が成し遂げられた時期に一致

さらに西部出雲への影響力を強めていった時期にあたる

大井への須恵器生産集約が外部からの原材料供給と工人集団の出張によって支えられていたとすれば、それを可能とするためには広域首長の介在が不可欠と考えられる

意宇中枢（出雲東部の広域首長）の地域統合達成期と集約生産開始の時期の一致は偶然の出来事ではない

想像を膨らませるならば、意宇中枢勢力の伸長は、中海と宍道湖の結節点にあって、東からの水上交通を管理することによって成し遂げられたものとも考えられる

畿内王権周辺とのつながりを強化すると同時に、東から物資や文化をコントロールすることが重要なファクター

生産と流通を象徴する須恵器生産を、二つの海の結節点にあたる大井に集約する意味は大きかったのでは

### 2) 生活様式の変化

大井への集約生産開始期は生活上も大きな変化

住居様式が、竪穴住居から掘立柱建物へ

土製支脚(火を焚く時の台)と移動式かまどの普及

土製支脚は出雲を中心とする地域のみに見られる煮炊具

土製支脚の大井地域と意宇郡中枢部の同一性

郡を越えて、両地域に密接な関係があったことを示している

## 6. 須恵器生産を担ったのは…

6世紀後半ころに始まる大井窯への須恵器生産集約は、出雲東部の広域首長権力による、手工業生産掌握を目的としたものであった可能性がある

掌握と言いながら、広域首長が工人集団の直接的な支配を行ったものとは考え難い

工人集団を直接掌握していたのは、小古墳や横穴墓に葬られた小地域首長であった

小首長を束ねて実質的に大井窯全域の直接管理を行っていたのは、島根郡の郡司であった社部臣であった可能性が高い

意宇中枢の最高首長だったと考えられる出雲臣氏と社部臣氏は、密接な関係を築いていた文献研究上からも、古墳時代後期の石棺式石室・朝酌型石室の関係からも明らかその間に実質的な上下関係があったこともほぼ間違いない

大井窯での須恵器集約生産は、特定階層の首長が単独で直接的に生産を把握したのではなく、各種の首長が重層的に関係する首長集団・グループ総体を基盤としていたと評価することができる

## 7. おわりに

大井窯跡群内部を分析して見ると、そのあり方に特徴的な2態があることがわかった  
海岸型の在り方は、須恵器の生産に出雲東部の広域首長から、小地域首長までがピラミッド的にかかわって須恵器の生産・流通が成り立っていたことを示している。

さらに広域的な地域の統合と意宇の中核的立場の確立は、中海・宍道湖をつなぐ水道(大橋川)の支配による広域流通の把握が背景にあった可能性が高い。

大井窯での集約生産は、それを実体化し、視覚的にアピールする効果をもたらした

一方で、須恵器の利用とその生産拡大は、ヤマト王権の地方支配のための楔との意見もある。  
部民制を含めて、今後の課題である。

なぜ松江が山陰の中心都市となったのか？

中世・近世史からは、なぜ松江に城下町が作られたのかが大きなテーマ

しかしその問題は、古代にもさかのぼる。二つの時期の中心地問題の本質は同じかも

次回 第6回 松江市史講座 12月10日(土) 伊藤康宏氏「宍道湖の恵みと宍道湖漁業」

松江市ホームページ URL <http://www1.city.matsue.shimane.jp/k-b-k/bunkazai/shishi/kouza/kouza.html>